

荒川にかかる開平橋

～時代とともに移り変わる橋の姿～

幾度も流されながら、そのたびにかけ直されてきました。



地上から見た開平橋



県道51号から見た開平橋

現在の開平橋と開平橋の名前の由来

現在の開平橋は1974（昭和49）年に完成し、荒川が東京湾に注ぎこむ箇所（荒川の河口）から48.0kmの地点に架かっています。長さは約800mあり、埼玉県の上尾市平方と川越市中老袋の境にある荒川を渡る、埼玉県道51号川越上尾線の橋です。入間川と荒川が出合う場所にあり、入間川の入間大橋と合わせ、両河川を渡る格好となっています。

開平橋付近では、古くは渡し船が使われていましたが、1883（明治16）年に今より少し川上の位置に橋長92.7m、幅2.73mの木橋が初めてかけられました。それは杭でつないだ十個の舟の上のせたいわゆる舟橋であり、舟が通るときは、橋の一部を開閉していた様子や、平方村の開拓への思いから開平橋という名前が付けられたとされています。

埼玉県立川の博物館に初代の開平橋の模型があり、橋が開閉する様子が展示されています。

▶ 舟で渡っていた江戸時代

江戸時代から開平橋の付近には平方に船着き場（平方河岸）があり、渡船場（平方の渡し）を兼ねていました。この渡し場は平方村にあって上尾宿（日本の近世にあたる江戸時代に整備され栄えていた宿場町で、中山道六十九次のうち江戸・日本橋から数えて5番目の宿場。現在の上尾市）と川越の城下町を結ぶ道と荒川が交差するあたりにありました。



かつての平方河岸周辺

▶ 木橋が架けられた明治時代

1883（明治16）年に完成した初めての木橋（開平橋）は舟が通ることができるよう橋の一部が開閉できるようになっていましたが、完成から7年後におきた洪水によって損傷したため、1890（明治23）年7月に修繕願いが提出され、大修繕の末1891（明治24）年6月に新たに舟4艘と橋脚10組（各2本）で支える橋に架けなおされました。橋長は約112.7m、幅は約3.6mでした。この橋は開閉できない橋となったため船の通航ができず、荒川の舟による運搬は手前の平方河岸までとなりました。終着点になった平方河岸は、しだいに鉄道に輸送を奪われつつも最後の繁栄を迎えました。1910（明治43）年の大水で再び壊れた開平橋は、1911（明治44）年頃に架けなおされましたが、このときに舟は廃され、橋脚がある板橋になりました。

▶ 木橋から永久橋にかわった昭和時代

1952（昭和27）年に新しい開平橋がやや下流側に架けられ、橋長は91m、幅は4.5mの木橋でした。水位が上がると冠水することは前と同じでしたが、バスやトラックの通行が可能でした。しかし、1958（昭和33）年9月に流失しました。

1959（昭和34）年に鉄筋コンクリートの橋脚に架け直され、橋桁と橋面は木製で、増水すると水をかぶるのは前と同じでした。水没時に流されないようにするため欄干がありませんでしたが、人や車の転落事故が相次いだため、簡易な欄干を設けました。1977（昭和52）年に新しい開平橋が完成した後もこの橋の使用は継続されましたが、1985（昭和60）年7月に撤去されました。

1977（昭和52）年4月1日に、今までの橋より川下の位置に永久橋が架けられました。建設には1971（昭和46）年から6年かかりました。これが現在の開平橋です。



昭和44年ごろの木造の開平橋

アクセス

開平橋

交通：川越線「指扇駅」下車、東武バス「平方・上尾」行き、「平方」下車、徒歩13分

住所：埼玉県上尾市平方



開平橋

